先端観光科学研究センターは、金沢大学の人間社会研究域の附属センターとして、2021年の4月に設置されました。前身の地域政策研究センターは20年近い歴史を持っておりましたが、それを継承する形で、地域政策の中でも「観光」に焦点を当てた研究センターを作ろうということで、発展させたものであります。
従来、観光学というと、人文学や人類学、あるいは経営学中心であったのに対して、本センターの特徴の1つとして、文理融合で、観光を「科学的」に解析するという点を重視していることがあります。センターの目的として3つ掲げております。第1に、移動・共感・共有に関するサイエンスとしての「観光科学」を確立すること。第2に、この「観光科学」の領域をリードする国際的な研究拠点を目指すということ。第3に、地域と共に、観光のイノベーションを進めて、持続可能な観光を実現するということです。理系と文系のメンバーが混ざっています。まずはセンター教員12名からスタートいたしました。

本センターを立ち上げるにあたっては、新しい観光の動向を意識しております。観光庁の資料によれば、以下の5つが挙げられています。1つ目は、第二のふるさとづくり。私の専門は地域経済学ですが、最近、地方創生と観光振興は、密接に連動するようになってきています。2つ目は、ワーケーションで、仕事と旅行の境目が薄れてきています。3つ目が、デジタル化で、仮想空間技術やリアルタイムデータを使って観光サービスにさまざまな変革が起きています。4つ目が、DMOによる広域周遊観光の実現。5つ目が、農漁業や飲食業と、宿泊業との一体的な事業再生の話です。
トーマス・クックが約180年前にガイドブックを発刊してから近代的な観光Tourismが始まったと言われているわけですが、近代的な観光とは一線を画した新しい多様なスタイルの観光が浸透しつつあります。「暮らすように旅する」というキャッチコピーが広まりましたが、そこからさらに進んで今では「旅するように暮らす」、「暮らす」という方に力点が移ってきています。また、あちこち移動しながら仕事をしたり、移動しながら学んだりすることができるようになりました。逆に、移動せずに、その場で、日常的に観光的な楽しみを享受することも人々のニーズとしては増えています。
これらは、人々の暮らし方を根本的に変え、新しいサービスやビジネスを生み出すと同時に、新しい社会課題をも生み出しつつあります。そこで、「観光」の考え方を大きく変えて、新しい課題に対応していかねばなりません。
「観光」の定義もおそらく変わります。近代的観光の文脈では、「非日常圏への移動」で「余暇活動の1つ」とされていましたが、いまや観光は日常化し、暮らしの一部になりつつあります。私たちは、「移動と共感を伴う多様な生活スタイル」という形で、従来よりも広い範囲で観光というものを捉えようと、議論しています。
2030年くらいまでには、次のようなことが、今よりもずっと進んでいると思います。まず、地域社会のあり方として、定住者だけでなく、移動する人を含む形で地域づくりを考えないといけなくなります。観光者は、消費者というよりも参加者という性格を強め、移動する人やものの情報を、いかに的確に把握し、マネジメントするかということが、社会のインフラ的な意味を持つようになって、観光全体も「スマートシステム」を前提とする観光に変わっているだろうと考えられます。そこで、「観光科学」の役割として、私たちは、大きく3点あると考えています。1つ目は、観光の第1要素として、「共感」の源泉を抽出し、評価することです。人々が観光の何に共感してリピーターとなるのか、これまでの観光では、実はほとんど「勘」で行われてきたのが実態でした。我々は、「共感」を計測し、多様な人に伝わる共感チャンネルの開発に取り組みます。2つ目は、観光のもう1つの主要要素である、「移動」データのリアルな計測と解析です。そのためのセンシング技術と、多方向からのデータを使った行動解析に取り組み、人流を効果的に予測できるようにしたいと考えています。3つ目は、地域社会を「共有」スタイルでリ・デザインすることです。関係人口とよく言われますが、地域にも関わる移動者をきちんとデータで把握することはまだできていません。移動して暮らす人と地域とをマッチングするために必要な技術や、外部者を含む地域資源の管理方式といったものも、新たな研究課題になってきます。
共感、移動、共有、という3つの領域を重ね合わせつつ、その中心に、データ・サイエンス、アナリティカル・プラットフォームを置いて、科学ベースの観光政策に寄与することを、本センターではテーマにしています。各部門の詳しい説明や研究紹介については、第2部でお話しする予定なので、ここでは概略だけ述べます。
共感研究部門では、文理融合で、心身データや言語データから「共感」の要素を抽出して分析する研究を進めています。移動研究部門では、工学系の研究者と経済の情報系の研究者が連携して、リアルタイムの移動行動データの解析を進めています。共有研究部門では、まちづくり、都市工学の研究者と、社会学・経済学・行政学の研究者が連携して、移動者を組み込んだ地域社会のデザインを研究しています。これらの研究の全てにおいて、自治体や企業あるいは地域コミュニティと連携して、社会実装的に研究を進めたいと考えております。
次に、先端観光科学研究センターの研究成果を、教育課程にも反映させていきたいということで、来年度開設を目指して準備しております、金沢大学融合学域の観光デザイン学類について、簡単にご紹介いたします。金沢大学では、医薬保健学域、理工学域、人間社会学域の3学域に加えて、新しい融合学域を立ち上げ、今年4月に先導学類をスタートさせました。融合学域のテーマは、ここに学長のサインで書かれておりますように、「文理融合の知識を基礎にイノベーションをリードする」です。この融合学域の第2学類として、来年4月に観光デザイン学類を発足する予定です。さらに、その次に第3学類として、スマート創成をテーマとする学類を構想中です。観光デザイン学類の基本コンセプトは、人文科学的アプローチ、社会科学的アプローチ、科学技術的アプローチを融合させて、観光のイノベーションを担える人材を育てるということです。
カリキュラムの中では、学年の早い段階から実践的な科目を重視し